大斎節前主日　マルコ9章2―9節

［新共同訳］

2　六日の後、イエスは、ただペトロ、ヤコブ、ヨハネだけを連れて、高い山に登られた。イエスの姿が彼らの目の前で変わり、3　服は真っ白に輝き、この世のどんなさらし職人の腕も及ばぬほど白くなった。4　エリヤがモーセと共に現れて、イエスと語り合っていた。5　ペトロが口をはさんでイエスに言った。「先生、わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです。仮小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、もう一つはエリヤのためです。」6　ペトロは、どう言えばよいのか、分からなかった。弟子たちは非常に恐れていたのである。7　すると、雲が現れて彼らを覆い、雲の中から声がした。「これはわたしの愛する子。これに聞け。」8　弟子たちは急いで辺りを見回したが、もはやだれも見えず、ただイエスだけが彼らと一緒におられた。

9　一同が山を下りるとき、イエスは、「人の子が死者の中から復活するまでは、今見たことをだれにも話してはいけない」と弟子たちに命じられた。

10　彼らはこの言葉を心に留めて、死者の中から復活するとはどういうことかと論じ合った。

11　そして、イエスに、「なぜ、律法学者は、まずエリヤが来るはずだと言っているのでしょうか」と尋ねた。12　イエスは言われた。「確かに、まずエリヤが来て、すべてを元どおりにする。それなら、人の子は苦しみを重ね、辱めを受けると聖書に書いてあるのはなぜか。13　しかし、言っておく。エリヤは来たが、彼について聖書に書いてあるように、人々は好きなようにあしらったのである。」

①文脈

ⓐペトロが「あなたは、メシアです」と信仰告白をすると、イエスは自分のことをだれにも話さないようにと戒める（八27―30）。その後、イエスは最初の死と復活の予告を行う（八31―九1）。9章1節には「神の国が力にあふれて現れるのを見るまでは」とあり、これにイエスの変容が続く。マルコにとって「イエスの変容」は、神の国の最終的な到来の予告でもある。

ⓑ9章2―13節には「イエスの変容とエリヤに関する問い」が述べられている。2―8節が「イエスの変容」物語で、イエスは神の愛する子として栄光に満ちた存在であると、この物語は示している。続く9―13節では、イエスが神の子であることが、神の国と復活に対するユダヤ人の待望という文脈の中に置かれている。ユダヤ人が誰でも知っているエリヤの到来に関する議論が変容物語に結び付けられることによって、変容に認められるイエスの栄光に満ちた姿だけに偏るのではなく、同時にイエスの死と復活が指し示される。特にここでは、洗礼者ヨハネの運命との関連で、イエスの運命が捉えられている。

②山に登る（2ａ節）

ⓐフィリポ・カイサリアでペトロの告白とイエスの受難予告があった六日後、イエスは三人の弟子を「連れて行き」、高い山に「連れて登った」。受難の場である平地から神の場である「高い山」にイエスは行く。2節に「高い山に登る」とあり、9節には「山から下る」とあるから、平地

と対比された高い山での出来事が描かれている。

ⓑ山に登る前、平地ではイエスの受難が予告されている。メシアが死ぬ、ということを想像できない弟子たちは聞いて戸惑い、悲しみにくれる。イエスはそのような弟子たちを「高い山に連れて登る」。

そして　六つの日々の後に
連れて行く　イエスは　ペトロとヤコブとヨハネを、
そして　彼は連れて登る　彼らを　高い山に、別個に　だけ。

「山」は日常から離れ、神との深い関わりに入る場所である。直訳で「別個にだけ」と訳した句は、イエスと三人の弟子が群衆から離れて「一緒に」いることを表しており、おろそかにされてはならない大事な教えが語られることがほのめかされている。

ⓒ山（オロス）

オロスは「山・丘」を意味し、新約聖書では63回使われ、福音書の用例が大半を占めている（マタ16回、マコ11回、ルカ12回、ヨハ5回、合計44回）。

㋐ほとんどは単数形で個々の山を指すが、複数形が使われ「山の多い地域・丘陵地帯」を意味することもある（マタ一八12、マコ五11、ルカ八32）。また、この語は単独で使われ、山の名が示されないのが普通だが、地名を伴って「オリーブ山」（マタ二一 1など11回も）、「シオンの丘」（ヘブ一二22）、「シナイ山」（使七30・38）を表す。また、文脈から「ゲリジム山」（ヨハ四20）、「シナイ山」（ヘブ八5）であることが分かる用例もある。

㋑ごく普通には地勢を表す地理上の用語として使われる。山の上にある町は隠れることがない（マタ五14）。山は牧畜の場所であり（マタ一八12）、山を動かすことが信仰を持つしるしとされる（マコ一一23）。悪霊に取りつかれた人は山で叫び（マコ五5）、終末の苦難を避ける避難所も山である（マタ二四16と並行記事）。

㋒しかし、「山」が宗教的な意味を含んで使われることも多い。「荒れ野（エレーモス）」と同じように、山でも、人は特別な出来事を通して神を身近に経験する。イエスは山上で説教し（マタ五1・八1）、終末のしるしを教え（マタ二四3、マコ一三3）、大勢の病人をいやす（マタ一五29）。イエスが十二人を召集し（マコ三13）、五千人にパンを与えたのも山であり（ヨハ六3）、復活したイエスが弟子たちに姿を現すのも山である（マタ二八16）。イエスにとっては祈りの場所でもある（マタ一四23、マコ六46、ルカ六12、九28）。

㋓マルコ9章では2節と9節に使われている。2節前半ではイエスは弟子たちを「高い山」に連れて登り、9節では「山」から下ったとあるから、2節後半から8節は山の上での出来事を描いていることになる。2節で「連れて行く」と「連れて登る」という同義語ともいえる動詞を繰り返したのは、弟子たちを山に伴おうとするイエスの強い意志を反映しているだろう。弟子たちが平地にとどまり続けるなら、人の思いを越え出ることができず、メシアの死はいつまでも謎となる。山に導き、神の声を聞くことが弟子にはどうしても必要だったのである。

③山の上で（2ｂ―8節）

ⓐこの段落はさらに三つの小段落に分けられる。

㋐イエスは「姿が変えられ」、衣服が白く輝くと、エリヤがモーセと共に現れ、イエスと話をする（2ｂ―4節）。

㋑ペトロは三つの仮小屋を造ろうと言い出すが、これは「何を答えるかを知らなかった」からである（5―6節）。

㋒雲が彼らを覆い、神の愛する子であるイエスに聞くようにと声があった（7―8節）。

最初と最後の小段落は神的な力の現れを述べ、間に挟まれた小段落では人間的な発想から抜け出せない弟子の無理解を述べて、両者を対比させている。

ⓑイエスは彼らの前で姿が変えられた

そして　彼は姿が変えられた　彼らの前で、
そして　彼の衣服が　なった　非常に白く輝くものに、
ほどに　地上のさらし屋が　そのように白くできない。

第二段落は「そして　彼は姿が変えられた　彼らの前で」と始まる。動詞「姿が変えられた」は受動形であるが、これは神的受動形（行為の主体が神であることを婉曲的に示す受動形）であるだろうから、イエスの姿を変えたのは神である。しかも、「彼らの前で」変えられたのだから、イエスの変容は弟子たちのために神が起こした出来事である。イエスの姿は「地上のさらし屋が白くできないほどに」輝く。「地上の」とわざわざ断ったのは、この白さが天上の輝きから発出していることを示すためである。

ⓒ姿を変える（メタモルフォオー）

動詞メタモルフォオーの用例は新約聖書では4回で、いずれも受動形である（マタ一七2、マコ九2、2コリ三18、ロマ一二2）。この動詞の基本的意味は「姿（モルフェー）を変える」。

㋐イエスは目に見える形で姿を変えた（マコ九2、並行マタ一七2）。イエスは人間としての姿を変え、神の子としての姿を現したのであり、受動形が用いられるのは、変容が神によって行われたことを示すためである。

㋑パウロは、この世に倣うのでなく、心を新たにして「自分を変えてもらう」ように命じる（ロマ一二2）。それは、キリストによって、何が神の御心であるか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なことであるかをはっきりとわきまえるようになるためである。受動形を用いたのは、こうした認識は人間の働きによらず、人間の心が神の力によって変えられて初めて可能になるからである。パウロは命令形〈変えられなさい〉を用いて、人間が神の働きを準備し、それに協力するよう求める。

㋒主の霊は、人を造り変える力を持っている（2コリ三18）。それは、復活したキリストの栄光

の姿に人々を造り変えるためである。信じる者は、主の霊によって「覆いを除かれ」、主の栄光、すなわち神そのものを「鏡に映し出すように見」、自分が見ている主と同じ姿になる。「栄光から栄光へと」とは、こうした変容が継続的なものであることを示す。

ⓔ以上から、メタモルフォオーには次の二つの意味があることが分かる。

⑴神が人間イエスの栄光を啓示すること。また、それによってイエスの弟子が（また、聖書の読者が）イエスに関する認識を深めること。

⑵キリスト者が、信仰によって、復活した主の栄光を知り、絶えず変容させられること。主を知ることによって、主を知った者自身が変わる。すなわち、キリスト者は主の栄光を知って、イエス・キリストの姿に似た者となり、神の意志をはっきりとわきまえるようになるのである。

ⓓエリヤがモーセと共に現れた

そして　現れた　彼らに　エリヤが　モーセと共に、
そして　彼らは　話しあっていた　イエスと。

さらにエリヤがモーセと共に現れ、イエスと話し合うが、話の内容は書かれていない。話した内容が重要なのではなく、エリヤとモーセが現れたこと自体に意味があるからである。当時のユダヤ教ではエリヤもモーセも天に上っていった人であり、天を住まいとする人である。2 節後半から 4 節では、イエスの姿が変えられ、エリヤとモーセが登場することによって、天の介入が強調されている。

ⓔペトロの提案

ラビ、　良いことである　私たちが　ここに　いるのは、
そして　私たちは造りましょう　三つの　仮小屋を、
あなたに　一つ　そして　モーセに　一つ　そして　エリヤに　一つを。

この光景にすっかり動転したペトロは、「ここに」いるのは素晴らしいと叫び、三つの仮小屋を造ろうと言い出すほどであった。これは熟慮したうえでの提案ではない。とっさの思いつきである。しかし、メシアが苦しむということを理解できないペトロは、無意識のうちにこの栄光にしがみつき、それを地上の「ここに」つなぎ留めようとしたのである。

ⓕ弟子は恐れた

なぜなら　彼は知らなかった　何を　彼が答えるかを、
なぜなら　恐れる者に彼らはなった。

㋐マルコは「なぜなら、彼は何を答えるかを知らなかった」と述べた上に、さらに「なぜなら、彼らは恐れる者となったからである」と付け加えている。ルカやマタイの並行記事も弟子の恐れを書くが、マルコとは違って、神の現存を表す「雲」が起こった後に、「弟子は恐れた」とある。

4 ペトロが口をはさんでイエスに言った。「主よ、わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです。お望みでしたら、わたしがここに仮小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、もう一つはエリヤのためです。」5 ペトロがこう話しているうちに、光り輝く雲が彼らを覆った。すると、「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者。これに聞け」という声が雲の中から聞こえた。6 弟子たちはこれを聞いてひれ伏し、非常に恐れた。（マタ一七4―6）

33 その二人がイエスから離れようとしたとき、ペトロがイエスに言った。「先生、わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです。仮小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、もう一つはエリヤのためです。」ペトロは、自分でも何を言っているのか、分からなかったのである。34 ペトロがこう言っていると、雲が現れて彼らを覆った。彼らが雲の中に包まれていくので、弟子たちは恐れた。35 すると、「これはわたしの子、選ばれた者。これに聞け」と言う声が雲の中から聞こえた。（ルカ九33―35）

従って、ルカやマタイでは弟子の恐れは神々しい力を目の当たりにした者の畏怖である。㋑それに対して、マルコでは「何を答えるかを知らなかった」ことの理由を表す文章になっている。しかも10節では、

彼らはこの言葉を心に留めて、死者の中から復活するとはどういうことかと論じ合った。

とあるように、物分かりの悪い弟子に言及している。このことから考えると、ここでも弟子の無理解を述べようとしているのかも知れない。そうであれば、マルコが描く弟子の恐れは恐怖に近い恐れであろう。栄光に輝くイエスの姿を垣間見ても、その意味を正確に理解できないのは、彼らが「恐れる者」となっているからである。彼らが栄光にしがみつくのは、受難予告を払いのけてしまいたいからである。受難に恐れを抱いているから、イエスの栄光の真意を把握できないで、的はずれな提案を口走る。

ⓖ弟子たちを雲が覆う

「雲」は神の現存を示す象徴である。そこから

「これは　ある　私の愛する子で、
聞きなさい　彼に。」

と声がある。受難を恐れて栄光にしがみつくのでなく、イエスに聞き従うことが神の望みである。神の声があり、見回すと「イエスだけ」が彼らと共にいた。それは、受難へと歩むイエスである。

④山から下る（9 節）

ⓐ誰にも語らないように命じた

彼は命じた　彼らに、
ようにと　誰にも　彼らが見たことを　語らない、
まで　人の子が　死者たちから　よみがえる。

山上で天上の栄光を垣間見た弟子は、山から下りて平地に戻り、再び日常の生活に戻ってゆく。そこに待ち受けているのはイエスの受難である。この受難によってイエスの真の姿が明らかになる。十字架上の受難を抜きにイエスの栄光を語れば、誤解につながる。そこで沈黙命令が出される。「見たことを語るな」とイエスが命じるのは、栄光に至る前に受難があるからである。しかし、弟子たちは、依然として、メシアの死を理解できずにいる。

⑤イエスと共に十字架を担う

ⓐイエスから受難と復活の予告を聞いた弟子たちは、イエスの死を受け止めることができない。ペトロは、イエスをわきへ連れ出し、いさめている（マコ八32）。十字架の受難へと向かうイエスに、弟子たちは悲しみを覚える。そこで、イエスは「山」に彼らを連れて上り、自分が受けることになる栄光を弟子たちに垣間見させると共に、神の栄光のために受難は避けられないことを教える。「平地」は人の思いに留まる場であり、「山」は神の声を聞く場である。

ⓑ「弟子たちの前で」イエスの姿は変わり、この世の者には作り出すことのできない白さをまとう。「弟子たちの前で」とあるように、イエスの変容は弟子にイエスが受ける栄光の意味を教えるためのものである。

ⓒ神の栄光をまとったイエスがエリヤとモーセと共に語り合う光景を弟子たちは見る。ペトロは目の前に繰り広げられた天上の至福を「ここに（地上に）」留めておきたいと願う。ペトロが「三つの仮小屋を造りましょう」と提案したのは、彼らがイエスの死を恐れ、イエスが神から受ける栄光の意味を理解できないからである。

ⓓ受難を経ずに神の栄光は与えられない。目の前の至福を留めようとするペトロの提案は神から退けられる。神が弟子たちに命じたのは、「私の愛する子に聞く」ことである。雲からの声が聞こえた後、弟子たちが周囲を見回すと、誰も見えず、イエスだけが自分たちと共にいるのを見る。弟子たちと共にいるイエスは、十字架の道を歩むイエスである。弟子たちはイエスと共に十字架を担うことを神は求めている。

ⓔ十字架の道こそが栄光への道である。それを教えるために、神が山の上で天からの栄光を弟子にまざまざと示して、イエスに聞き従がって受難の道を歩むようにと呼びかける。受難を恐れて天上の栄光を地につなぎ留めようとするのではなく、イエスと共に十字架を担い、永遠の栄光を目指して歩むべきである。なぜなら、十字架の苦しみは背負うにたる価値ある苦しみだからである。